

節分の豆まきは、鬼を払う力があるとされる大豆を撒くことで新たな季節を穏やかに迎えようとする行事です。

「豆とりて 我も心の 鬼打たん」

江戸時代の俳人、^{しだやば}志太野坡の句です、追い払おうとしている鬼を、自分の心の中に見ています・・・、心の中の鬼とは何でしょうか。

それは、貪りや怒り、嫉妬や恨みなどの、自分そして他の人を傷つけ苦しめる感情や欲望だと思います。仏教では煩惱といいます。

仏教の初期のお経には、煩惱の象徴と考えられるマーラが登場します。煩惱が心の中の鬼ならば、マーラもまた鬼であるといっていいいでしょう。

マーラはいろいろな姿で現れ、様々な言葉を使い、お釈迦様や修行者たちに語りかけ惑わします、

マーラはそのようにして、お釈迦様や修行者たちの心を試しています。その試みに対し、お釈迦様や修行者たちは、お釈迦様がさとられた智慧の言葉で、冷静に答えています。その答えを聞いたマーラは消えていくのですが、その様子は、お経では次のように描かれています・・・。

くマーラは「尊き人はわたしのことを知っておられるのだ。幸せな方は私を知っておられるの

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

だ」と気づいて、打ち萎れ、憂^{うれ}いに沈み、その場で消え失せた・・・。〉

このマーラの言葉の中の「私を知っている」に注目したいと思います。「私」というのは煩悩の象徴であるマーラのことですので、言い換えれば「煩悩を知っている・煩悩に気づいている」ということになるでしょう。お釈迦様や修行者たちは、煩悩に気づき、智慧の光を当てているのです。その時、マーラは消え失せます。

煩悩は、肉体をもって生きている限り生じるものです。それを、あたかもないかのごとく生きていくのではなく、常に心の中に生じていないか見つめ続け、智慧の光を当てることが大切だということを、お経でのマーラとの逸話は示しているのではないのでしょうか。

ここで始めに紹介した志太野坡の俳句を思い返してみましよう。節分の豆を手に取り撒こうとした時、同時に「心の鬼」を打とうとした作者は、自らの中の鬼に気づいているといえます。

災いがないように願いながら、心の中の鬼を見つめ自らをととのえていく、そんな日々のごし方をしていきたいものです。

— 終 —